大学女子ハンドボール競技における

右バックコートポジションにおける１対１突破プレーについて

-右利きプレーヤーに着目して-

伊地知 愛妃（201711845、ハンドボールコーチング論）

指導教員：藤本元、會田宏、山田永子

キーワード：映像分析、学生レベル

【目的】

右バックコートポジションにはシュート角度が大きくなる左利きプレーヤーが配置されることが多い。しかし、チーム事情によって右利きプレーヤーを右バックコートポジションに配置するチームは少なくない。右利き右バックプレーヤーは 1 対 1 で突破してゴールを奪うことやディフェンスにずれを生じさせることが重要になってくる。そこで、本研究では、右バックコートポジションにおける右利きプレーヤーの 1 対 1 に着目し、右利き右バックプレーヤーの突破プレーにおいて有効な突破方法を明らかにすることを目的とする。

【方法】

本研究では、平成 30 年度関東学生ハンドボール女子春季リーグ全 40 試合の右バックコートポジションにおける右利きプレーヤーの 1 対 1 局面、273 シーンを研究対象とした。

分析項目は、ボール保持前の 6 項目（横方向の位置取り、縦方向の位置取り、スピード、ディフェンスプレーヤーとの位置関係、ディフェンスプレーヤーの牽制の有無、動き方のパターン）、ボール保持開始時の 8 項目（横方向の位置取り、ディフェンスプレーヤーとの位置関係、ディフェンスプレーヤーの縦方向の位置取り、間合い、突破のパターン、突破方向、歩数、ドリブルの有無）、プレー結果（有効：シュート、ディフェンスプレーヤーの警告および退場、7mスロー獲得、アシストパス、有効ではない：フリースロー、ボールの所有権を失うすべてのミス、ディフェンスプレーヤーにずれが生じなかったパス）である。

統計処理にはカイ 2 乗検定と残差分析を用いた。

【結果と考察】

(1) ボール保持開始時のディフェンスプレーヤーとの位置関係が利き手側にずれる場合は有効なプレーになりやすく、正面の場合は有効なプレーになりにくいことが認められた。ディフェンスプレーヤーが非利き手側に位置している場合はそのまま利き手側に突破しやすく、サイドディフェンスプレーヤーを引き付けることができればアシストパスにもつながるため、有効なプレーになりやすいと考えられる。また、ディフェンスプレーヤーが正面に位置している場合は、ディフェンスプレーヤーが左右に位置を修正せず対応できるため、有効なプレーになりにくいと考えられる。

(2) 突破のパターンが 0 ステップまたは 0−1 ステップの場合は有効なプレーになりにくく、パスフェイクをした場合は有効なプレーになりやすいことが認められた。0 ステップはディフェンスプレーヤーの正面に入る可能性が高く左右の揺さぶりが小さいため、有効なプレーになりにくいと考えられる。また、0-1 ステップはディフェンスプレーヤーを動かすための重心移動が容易ではないため、有効なプレーになりにくいと考えられる。パスフェイクはディフェンスプレーヤーがボールから「目をきる」ことで準備を遅らせ、突破スペースを作ることができる可能性や、隣のディフェンスプレーヤーがパスフェイクにかかることで、突破するスペースができる可能性があるため、有効なプレーになりやすい考えられる。

(3) 突破方向がインの場合は有効なプレーになりにくく、アウトの場合は有効なプレーになりやすいことが認められた。インに突破する場合はシュートが狙いにくく、隣のディフェンスプレーヤーを引き付けることも難しくなるため、有効でないプレーになると考えられる。また、アウトに突破する場合はシュートが狙いやすく、サイドディフェンスプレーヤーを引き付けアシストパスできる可能性もあるため、有効なプレーになりやすいと考えられる。

(4) ドリブル無しの場合は有効なプレーになりやすいことが認められた。ドリブルを使用する場合、ディフェンスプレーヤーが位置を修正したり、隣のディフェンスプレーヤーがフォローによる時間ができたり、ドリブルカットをされる危険性があるため、有効なプレーになりにくいと考えられる。